

情報構造に基づくフェイズ研究に向けての 一考察：「前提」をどう扱うか

吉田 江依子

1. はじめに

フェイズ(phase)とは、派生の出力単位となる統語領域であり、Chomsky (2000)の提唱するミニマリスト・プログラムにおいて、言語分析のための重要な理論装置となっている。ミニマリスト・プログラムはヒトの言語機能の理論装置を極力減らす方向で理論を発展させてきているが、フェイズに関しては併合(Merge)とともに、排除することのできない言語機能の一つであろうと考えられている。

Chomsky (2000)はフェイズに関する初期の提案において、統語範疇 CP 及び v^*P がフェイズ領域を構成すると主張した。(のちに DP についてもその可能性を示唆している。) ミニマリスト理論を枠組みとした言語研究の多くは、この提案に基づき具体的な構文分析などを行っており、「統語範疇 CP, v^*P (及び DP)がフェイズ領域を構成するものである」という考え方は、言語分析の根幹をなしてきた。

ところが近年、この考え方に対して多くの問題点が指摘され始めている。そして、Legate (2003)は VP, vP を、Richards (2007)は TP を、Abels (2003)は PP もフェイズであると主張している。Bošković (2007), Müller (2010)などに至っては、すべての最大投射がフェイズであるという主張を行っている。それぞれのアプローチの方法は異なるが、これらの研究結果は、フェイズを CP および v^*P に限定することに問題があることを示しており、CP/ v^*P がフェイズであるという定義を前提とした多くの言語分析の妥当性を根幹から覆すものになってしまう。

このようなフェイズに関する研究動向の中で、吉田(2014)は、本質的な問題点は、CP および、 v^*P といった特定の統語範疇をフェイズにするという先行研究が指摘しているようなところではなく、範疇という統語的概念にフェイズの

機能を求めること自体に問題があると指摘し、その統語範疇に関わらず、前提 (presupposition) という情報を持つ領域がフェイズを形成し、言語の派生を決定するという提案を行った。

この研究では、特に進化言語学の観点からその妥当性について追及し、その方向性・妥当性については、一定の賛同を得ている (cf. 藤田 (2014:291))。しかしながら、実証的にいくつかの問題点も残っている。本論文の目的は、その問題点を指摘し、「前提」の概念について整理・検証することによって、情報構造に基づくフェイズ研究を将来的に推し進めていくための足掛かりとしたい。

本論文の構成は次のとおりである。2 節では情報構造とは何か、また生成文法理論の中でどのような位置づけとなっているのかを論じる。3 節では、吉田 (2014) の提案について概観し、問題点を指摘する。4 節では、情報構造における「前提」の概念の多様性について整理し、残された問題点を指摘する。5 節は結語である。

2. 情報構造と統語部門

2.1 情報構造

言語研究には、大別して、言語能力 (language competence) の観点から分析する立場と、言語運用 (language performance) の観点から分析する立場がある。前者が、文を言語使用と切り離して分析するのに対し、後者は談話の中でその文がどのような情報を伝達しているのかを分析する。

通常、談話において話し手は、聞き手が知っていると思う情報 (旧情報: old information) に、聞き手が知らないと思われる情報 (新情報: new information) を加えるという形で情報伝達をおこなっている。言語使用の観点から見た場合、文は、旧情報と新情報から構成される情報構造によってとらえられる。(1)(2) について考えてみよう。

- (1) A: What did John do?
B: He WASHED THE DISHES.
- (2) A: What did John wash?

B. He washed THE DISHES.

(Erteschik-Shir (2007: 1))

(1B)、(2B)において、語句の配列は同じであるが、両者の情報構造は異なる。ジョンが何をしたかを問う(1A)のあとでは、「ジョン」のみが旧情報であり、「皿を洗った」は新情報となる。一方、ジョンが何を洗ったかを問う(2A)の後では、「皿」のみが新情報となっている。このように情報構造は、文脈から切り離して決めることはできず、談話の中で新・旧の情報が決定される。

2.2 新情報と旧情報

情報構造における新情報・旧情報については(3)で示したように、様々な用語で表現されている。

- (3) a. focus / presupposition (焦点・前提)
- b. focus / ground (焦点・背景)
- c. focus / topic (焦点・話題)
- d. topic / comment (話題・評言)
- e. theme / rheme (話題・題述)
- f. categorical /thetic (定言・断定) (cf. Zubizarreta (1998:159))

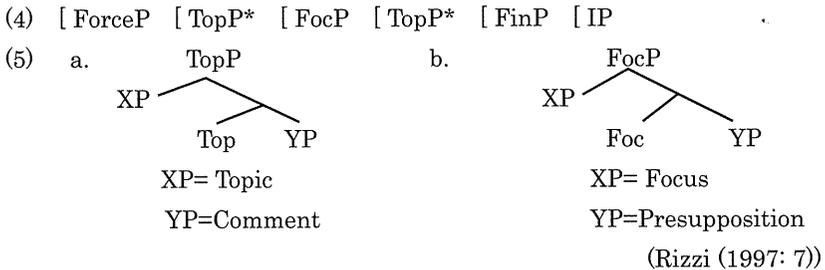
例えば、(3a-c)において、新情報については「焦点」という語を使っているが、旧情報を表す語については、前提、背景、話題など、研究者によって別の語を使って表現している。¹ また、「話題」という用語が、(3c)では旧情報を表す語として使われ、(3d)では新情報を表す用語として使われており、同じ語が別の内容を示すこともある。さらに、(3e)では、theme (話題)が新情報、rheme (題述)が旧情報を表すものとして使っているが、主題・題述関係は、文の構成素の配列、つまり語順にのみ関わるものとして、表層構造における文頭の要素を主題とし、主題を除いた残りの部分が題述であるというように、新・旧情報とは関係なく使われる場合もある。

このように、情報構造については、様々な表現が用いられており、その用語の定義をきちんと示した上で議論を進めないと、問題や矛盾などが生じてくることになるであろう。² 3節では「前提」についてより詳細に概観し、問題点の指摘と解決を示す。

2.3 狭義の統語部門との接点

Chomsky が提案した生成文法において、言語の研究対象はヒトのもつ言語能力(language competence)であり、言語運用(language usage)はその研究対象とはなっていない。前節で論じた情報構造は言語運用の範囲に入るもので、従って長年、生成文法理論の中では議論の対象とはなっていない。³

しかし、Rizzi (1997)において、談話構造における情報を統語構造の中にとり入れる提案がなされた。具体的には、(4)で示したように、CP の構造を分節化し、そこに情報構造に関わる FocP(焦点句)、TopP(話題句)を組み入れている。



(5)で示したように、話題句においては、指定部と補部が話題・評言、焦点句については焦点・前提といった談話機能を直接統語構造で反映させている。

このように、談話の文法が生成文法理論の枠組みの中に取り入れられ、その妥当性については、英語だけでなく、多くの言語における言語事実からも支持されている(cf. Endo 2007, Badan and Del Gobbo 2010)。このことは、言語の統語的特性を研究する上で、情報の概念が必要不可欠なものであるということを示唆しているだろう。

3. フェイズ理論と情報構造の関連性

吉田(2014)は、情報構造に関する概念が、Rizzi (1997)の提案のように統語構造に句として直接反映されるだけでなく、フェイズ領域の規定にも関連するという主張を行った。この主張は、情報構造と狭義の統語部門の間にはさらなる

密接な関係が存在することを示唆し、情報構造に基づく統語研究を推し進める上でも重要なものである。以下、提案の概略を示した上で、提案の根幹をなす「前提」の概念について考察し、今後、情報構造に基づくフェイズ研究を進めていくための問題点を洗い出すこととする。ここでの考察は、この研究をより精緻化されたものへと導いていくことになることと期待する。

Chomsky (2000)はフェイズに関する定義において、統語範疇 CP および v^*P がその役割を担っているとしている。吉田(2014)ではこの定義には3つの経験的・概念的の問題があることを指摘した。第一に、1節で述べたように、先行研究において、CP および v^*P 以外の統語範疇がフェイズ領域となりうるという反論がなされている。これらの研究結果は、経験的にフェイズが統語範疇 CP / v^*P に規定することに問題があることを示している。第二に、なぜこの二つの統語範疇だけがフェイズとして規定されるのか、という概念的の問題である。Chomsky (2000)ではその概念的根拠として両統語範疇が命題(proposition)という意味的特性をもつというところに共通点があると述べているが、では、なぜ命題はフェイズになるのか、という問題に突き当たる。さらに第一の問題点として指摘したように、CP/ v^*P 以外もフェイズということになれば、「命題＝フェイズ」という主張はもはや維持することはできない。第三に、フェイズを統語範疇によって縦断的に規定することはできないという問題を指摘した。すなわち、同じ統語範疇であっても、フェイズとして機能する場合もあれば機能しない場合もあるという点である。例えば、DP において、(6a)で示したように DP から wh 句を抜き出すことはできるが、(6b)で示したように wh 句の抜き出しは不可能となる。

- (6) a. Who_i did you see [_{DP} a picture of t_i]?
b. *Who_i did you see [_{DP} the picture of t_i]? (Diesing (1992: 103))

同じ統語範疇であるのに、一方はフェイズを超えて wh 句が移動できるのに対し、一方がフェイズを超えることができないというのは、フェイズを統語範疇のみで規定することの大きな問題点であることを指摘した。

以上の問題点をもとに、フェイズ領域を規定するのは、統語範疇ではなく、「前提」であるという提案を行った。すなわち、統語範疇に関係なく、その統語領域が「前提」を表す場合にはフェイズとなるというものである。

(7) フェイズは前提 (=既知の出来事・状況) を表す領域

この提案によって、先の(6)の文法性の差が説明できる。(6b)は定冠詞を含む DP である。定冠詞を含む DP は内在的に前提を示すものなので、フェイズ領域を形成し、その結果、wh 句の抜き出しが不可能となる。一方(6a)は不定冠詞を含む DP であるため、前提を示すものではなく、フェイズ領域とはならない。よって、移動は可能となる。

さらに、不定名詞であってもそれが主語位置にある場合は、抜き出しができない。

(8) *Who_i did [_{DP} pictures of t_i] cause Mary to cry? (Boeckx (2012: 21))

これは主語位置が、節において話題を表すものであり、既知の情報、つまり前提を表すためである。主語位置にある場合はフェイズを形成し、wh 句の移動を阻止するのである。主語からの抜き出しができないのは、DP に限らない。(9)で示したように CP であっても、主語になるとフェイズを形成する。

(9) a. What_i do you think [_{CP} that Mary bought t_i]?

b. *Who_i did [_{CP} that she knew t_i] bother him?

(9a)は目的語 CP からの抜き出しであり、(9b)は主語 CP からの抜き出しであるが、主語位置は前提を表すためフェイズを形成し、抜き出しができない。ここでも、統語範疇によらず、前提という情報単位がフェイズを決定する要因となっていることを示している。

前提による定義は PP における振る舞いの差も説明ができることを論じている。(10a)で示したように、PP からの wh 句の抜き出しは可能であるが、(10b)に示したように、話題化された PP からの抜き出しは阻止される。

(10) a. Who_i do you think that he will talk [_{PP} to t_i]?

b. *Who_i do you think that [_{PP} to t_i]_j he will talk t_j?

話題化される句は、一般的に旧情報を担うものであり話者や聞き手にとっての

前提となっているものである。従って、(10b)のPPはフェイズとなり、よってwh句の移動が阻止されるというものである。

以上、「前提」という情報構造に関わる概念が、狭義の統語部門において重要な役割を果たしているという吉田(2014)の論考を示した。但し、ここでの大きな目的は、進化言語学の観点から情報といった意味・談話の概念をとりいれるべきであるという主張であり、前提とは何かについては、一般的な定義を参考に、旧情報を表す概念であるという程度にとどめられ、詳細については触れていない。提案(7)の妥当性を今後問うていくためには、基盤となる前提に関する考えを形式化することは重要であろう。次節では、前提について考察する。

4. 前提について

4.1 語用論的前提

吉田(2014)では、「前提」とは話し手と聞き手にとっての既知の出来事・状況、つまり、旧情報を表す概念であるという定義を与えていたが、もともと前提には、二つの異なった意味がある。一つは、文の発話場面における話し手の信念や話し手と聞き手との共有知識という概念に基づいて定義されるもので、語用論的前提(pragmatic presupposition)と呼ばれている。語用論的前提は、談話において話し手が聞き手と共有していると思っている背景知識、聞き手にとって既知のことであると仮定されている情報、という点で、大まかに言えば、旧情報と等しいものであるが、詳細なところで研究者によって解釈の仕方が異なり、共通の明確な定義を与えられていないという問題点がある。

また、細かい点でいえば、旧情報と既知情報は異なったものである。前者が聞き手も知っている、あるいは意識していると話し手が想定している情報のことを言うのに対し、後者は一定の人々は知っているとして話し手が想定しているが、多くの場合に聞き手を含まない情報のことを指す(cf. 井上(2009: 149))。つまり、前者が聞き手の存在を含意するのに対し、後者は聞き手の存在を含意していないことになる。これによって、聞き手にとっては、既知ではあるが新情報という状況が生じてくる。

- (11) A: Which laundry did John wash, the white or the colored?

B: He washed the white laundry. (Erteschik-Shir (2007: 29))

(12) A: 昨日私に手紙が来たと思います。

B: いや、小包みが来たのです。 (井上(2009: 152))

(11)において、*white* という語はすでに出ているので、聞き手 A にとっては既知の情報であるといえる。しかし対比を表す意味では、聞き手にとって新情報となっている。(12)の「小包み」は、話し手 B は知っているため既知の情報ではあるが、聞き手 A にとっては来たものが小包とは知らないため、新情報となっている。このような点から、フェイズ理論に情報構造を取り入れる際には、聞き手を含意する必要があるのか否かを言語データから検証し、「前提」についての定義を再検討する必要があるであろう。

新情報・旧情報と前提に関連について、もう 1 点考察することがある。それは話題化に伴う新情報・旧情報の区別である。話題化とは、言語要素を文(節)の先頭に移動することで、一般的には、旧情報を担う。(13)、(14)をみてみよう。

(13) What did John give to Mary?

(14) a. John, he gave Mary the book.

b. Mary, John gave her the books.

c. *The books, John gave to Mary.

d. *The books, John gave them to Mary.

(15) 教科書は、お父さんに本屋で買ってくれるように頼みました。

(ibid.:154)

(13)の問いに対して、(14a-b)は、話題化された要素が旧情報 *John, Mary* なので容認可能であるが、(14c-d)の *the books* は旧情報、正確に言えば既知の情報となっている。また、日本語においても、(15)に示したような文は「教科書」がすでにその談話に出てきている旧情報を担うものでなければ、容認されない。(10)ではこの特性をもとに、話題化された PP は旧情報であるためフェイズを形成し、そこからの *wh* 句の移動は阻止されるという議論を行った。しかしながら、話題化された要素が必ずしも旧情報とならない場合もある。

- (16) A: What did John give Mary?
 B: *A doll* he gave her.

(16B)では、文頭の名詞句 *a doll* は話題化されたものであるが、新情報を担っており、この場合はフェイズを形成しないことを証明しないとならない。⁴ 形式言語学の面では同様の話題化構文であったとしても、情報構造の概念によっては逆の振る舞いを示すことになってしまうため、さらなる言語事実を探っていく必要があるであろう。

これに加えて、後置される要素の抜き出しについても検討する必要があるであろう。英語において、(17b)で示したように、後置される要素は新情報であることが多い。

- (17) a. A beautiful flower garden extends to the river bank.
 b. There extends *a beautiful flower garden to the river bank*.
 (ibid.)

(7)の提案に基づけば新情報はフェイズを形成しないため、後置される要素からのさらなる抜き出しは可能となることが予測される。従って、前置された話題化の問題とともに論じることによって、フェイズと情報単位の関連性が明らかになるであろう。

4.2 論理的前提

もう一つの前提の概念は、論理的前提(logical presupposition)と呼ばれるものであり、(18)で定式化されているように文の真理値からの定義となっている。

- (18) 文Sが真ならば文S´も必ず真であり、かつSが偽であってもS´は必ず真であるとき、SはS´を論理的に前提とする

例えば、(19a)が真ならば、(19b)は必ず真であり、かつ(19c)で示したように、(19a)が偽であっても(19b)は必ず真であるから、(19a)は(19b)を論理的に前提としていると言える。

- (19) a. The girl he married was an heiress.
 b. He married a girl.
 c. The girl he married was not an heiress.

(荒木・安井 (1992: 484))

このような論理的前提をもつと考えられる表現には、定名詞句(20)、叙実的述語(21)、含意動詞(22)、相動詞(23)、反復表現(24)、分裂文(25)、擬似分裂文(26)非制限的關係詞節(27)、時を表す節(28)、比較節(29)など、様々なものがある。以下では(a)の文が(b)を論理的に前提としている。

- (20) a. *The biography of Edison* was published yesterday.
 b. There is a biography of Edison. (ibid.: 732)
- (21) a. John *regrets* that it is raining.
 b. It is raining.
- (22) a. John *managed* to open the door.
 b. John tried to open the door.
- (23) a. John *stopped* beating his wife.
 b. John had been beating his wife.
- (24) a. Fred called *again*.
 b. Fred called.
- (25) a. It was his hypocrisy *that annoyed me*.
 b. Something annoyed me.
- (26) a. *What annoyed me* was his hypocrisy.
 b. Something annoyed me.
- (27) a. John, *who likes music*, is a good pianist.
 b. John likes music.
- (28) a. John left *when Mary called*.
 b. Mary called.
- (29) a. Tom has a bigger stamp-collection *than I have*.
 b. I have a stamp-collection. (ibid.: 1132)

吉田(2014)でも定名詞句の事象を取り上げ、定冠詞を含む DP が内在的に前提

を示すため、フェイズを形成すると論じており(cf. (6))、先の語用論的前提に加えて、論理的前提をも念頭にいていることを示唆している。⁵ もし、その主張が正しいとするならば、同様に論理的前提を含む(21)から(29)においても、前提となる部分がフェイズを形成していることになるので、統語構造あるいは統語操作に何らかの影響を与えていることが予測される。この点について検証がなされておらず、今後実証的に証明することによって、より説得力のある論考となるであろう。

最後に、語用論的前提と論理的前提の関係について考察したい。前節で述べたように、語用論的前提が、談話における旧情報であるのに対し、論理的前提が真理値に基づく定義となっており、一見したところ両者は異なる概念に基づく定義であるように思われる。しかしながら、例えば、論理的前提の中で、(21)のような叙実的述語から生じる叙実的前提には、真の叙実的述語と半叙実的述語があり、前者が、その補文がどんな状況においても前提とされるものであるのに対し、後者は、その補文が真であるという前提が状況により変化する。⁶ 後者における前提は、純粋に語彙項目の意味によってもたらされるわけではなく、談話中での状況、つまり、語用論的状況との兼ね合いで決定される。従って、語用論的前提と論理的前提の間に明確な境界線がない事例となる。語用論的前提と論理的前提がどのように関連しているのか、という点についても、今後明確な定式化をしていくことが必要となってくるであろう。

5. まとめと今後の展望

旧情報、新情報、前提、背景など、情報構造に関わる概念は、研究によって様々な定義が与えられており、詳細な部分においては相違点もある。本論文では、前提という概念を中心に、用語の整理を行いながら情報構造に基づくフェイズ研究をより実証的に推し進めていくための問題点を明らかにした。今後は本論文で指摘された問題点や方向性に基づき、情報構造を狭義の統語部門の中に組み入れることの妥当性を追究していきたい。

注

- (1) (3b)については、foreground / background (前景・背景) という言い方もある。
- (2) 用語の定義について明確に述べるということは、どの研究分野においても当然必要なことではあるが、特に情報構造を扱う場合には(3)で示したように様々な用語が存在するため、怠ってはいけない点である。
- (3) 久野 (1978) は、日本語研究から言語運用もとりにいれる必要があるということをも早くから主張している (cf. 井上 2009)。
- (4) この場合、*a doll* には新情報を示す核強勢が与えられる。また、*a doll* の後ろには音声的な切れ目は与えられない。
- (5) 定冠詞を含む前提は、特定の語彙項目の固有の意味特性に起因することから、特に内在的前提(inherent presupposition)と呼ばれている。
- (6) 真の叙実的述語には、*regret, resent, forget, amuse, suffice, bother, care, be odd, be strange, be interesting, be relevant, be sorry, be exciting* などが含まれ、半叙実的述語には、*find out, discover, know, learn, note, notice, observe, perceive, realize, recall, remember, reveal, see* などがある。

参考文献

- Abels, Klaus (2003) *Successive-cyclicity, Anti-locality, and Adposition Stranding*, Ph.D dissertation, University of Connecticut.
- 荒木 一雄・安井 稔 編 (1992) 『現代英文法辞典』三省堂 東京
- Badan, Linda and Francesca Del Gobbo (2010) "On the Syntax of Topic and Focus in Chinese" *Mapping the Left Periphery: The Cartography of Syntactic Structures vol. 5*, ed. by Paola Benincà and Nicola Munaro, 63-90, Oxford University Press: Oxford.
- Boeckx, Cedric (2012) *Syntactic Islands*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bošković, Željko (2007) "On the Locality and Motivation of Move and Agree: An Even More Minimal Theory," *Linguistic Inquiry* 38, 589-644.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Endo, Yoshio (2007) *Locality and Information Structure: A Cartographic Approach to Japanese*, John Benjamins, Amsterdam.
- Ertistick-shir, Nomi (2007) *Information Structure: The Syntax-Discourse Interface*, Oxford University Press, Oxford.

- 藤田 耕司 (2014) 「投射の進化的問題」『言語の設計・発達・進化：生物学探究』藤田 耕司、福井直樹、遊佐典昭、池内正幸(編) 279-307 開拓社 東京
- 井上 和子 (2009) 『生成文法と日本語研究：「文法」と「談話」の接点』大修館書店 東京.
- 久野 彰 (1978) 『談話の文法』大修館書店 東京
- Legate, Julie Anne (2003) “Some Interface Properties of the Phase,” *Linguistic Inquiry* 34, 506-516.
- Müller, Gereon (2010) “On Deriving CED Effects from the PIC,” *Linguistic Inquiry* 41: 35-82.
- Richards, Marc, D. (2007) “On Feature-inheritance: An Argument from the Phase Impenetrability Condition,” *Linguistic Inquiry* 38, 563-572.
- Rizzi, Luigi (1997) “On the Cartography of Syntactic Structures,” *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures Volume 2*, ed. by Luigi Rizzi, 3-15, Oxford University Press, Oxford.
- 吉田 江依子 (2014) 「フェイズの意味的・概念的特性と進化的妥当性について」*JELS* 31, 256-262.
- Zubizarreta, Maria Luisa (1998) *Prosody, Focus, and Word Order*, MIT Press, Cambridge, MA.